

ハイチ大地震から2年4カ月

現地医師招き 医療技術指導

神戸のNGO

2010年1月、大地震に見舞われたカリブ海の島国ハイチ。衛生環境の悪化による深刻な感染症を食い止めようと、神戸市の非政府組織(NGO)「フューチャーコード」が6月から現地医師2人を招く。兵庫医科大学病院(西宮市)や神戸市保健所も協力し、日本の医療技術を伝える。(岩崎昂志)

ハイチ大地震は30万人以上の死者を出し、150万人以上が家を失ったとされる。ハイチは最貧国の一つで、復興は思うように進まず、今もテント生活を続けたり難民化したりする被災者もいるという。

若手医師らでつくるフューチャーコードのメンバーで兵庫医科大学病院呼吸器外科医師の大類隼人さん(31)は、東日本大震災の医療支援に加わったからハイチにも関心を寄せるようになった。

昨年5月に訪れた現地病院は、被災から1年

以上が過ぎても崩壊したまま。結核やコレラなどの患者が集団で收容されたテントにはハエが飛び、薬や検査機器などの不足で十分な治療ができず、命が失われていた。7千人以上がコレラで死亡したという。

現地で長く医療支援に取り組み「ハイチのマザーテレサ」と呼ばれる日本人医師須藤昭子さん(85)から「病院はいつか再建できるが、専門医が足りない」と聞かされ、医師教育を提案した。

6月から約1カ月半、須藤さんが推薦したグレイ・ジャッセン医師(38)

感染症対策が急務

とシエルタ・パスカル医師(32)、通訳の3人を受け入れる。呼吸器や放射線の専門医らが、高価な機器がなくてもできる診断・治療法を教える。神戸市保健所では結核対策の検診事業を体験してもらった。

大類さんは「彼らの帰国後も、日本で学んだ医療技術が現地に根付くまで支援したい。この取り組みが、ハイチの現状を日本に伝える『懸け橋』にもなれば」と話す。



医師らの渡航・生活費は寄付で賄う予定。6月4日午前11時まで、インターネット上のサイト「Ready For? (レディーフォー)」で、200万円を目標に募っている。フューチャーコードへの連絡はメール info@future-code.org

来日するジャッセン医師(左端)とパスカル医師(右端)、大類さん(右から2人目)はフューチャーコード提供